



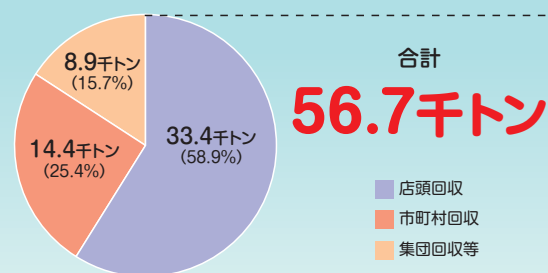
小売事業者のリサイクル状況

店頭回収は身近で重要な
回収拠点になっています。

家庭系紙パック回収量の50%以上を占める店頭回収。今年は前年度に比べ、回収量が1.6千トン増加しました。

これは、日本チェーンストア協会と日本生協連の会員外である店舗を対象とした独自調査の結果が、前年度から増加したことに起因しています。反対に日本チェーンストア協会は0.1千トン減少しました。1店舗当たりの回収量が前年同様であることから、会員事業者の変動が影響していると考えられます。日本生協連の回収量は、ここ数年安定しています。

家庭系紙パックの回収拠点別回収量（推計値）



取り組んでいます! リサイクル

株式会社 平和堂

(本社：滋賀県彦根市)

取り組み事例

平和堂は、滋賀県を中心に123店舗を展開。「お客様満足度の高い会社の実現」、「社会満足度の高い会社の実現」、「地域社会や環境の共生をはかる会社の実現」を経営方針に掲げています。ISO14001を本部および全店舗で認証取得し、環境の保全、食育活動等、地域とのコミュニケーションにも力を入れています。

その一つが、小学生を対象とした「平和堂エコピースクラブ」の実施。買い物疑似体験やクイズラリーを通じて、環境に配慮した食べ物を選び方や3Rの定着を、お客様と一緒に楽しく推進する「体験型環境学習」のプログラムです。

紙パックの回収では、各店で回収した紙パックをビニールバッグに詰め替えて保管し、物流センターに集約。小学校の学乳紙パックも、子どもたちがリサイクルに触れる貴重な機会として、収益に関係なく回収しています。紙パックの売却で得た収益金は、琵琶湖の環境保全を目的とした団体に寄付し、地域の環境保全につなげています。



センターに集められた牛乳パック



小学校の学乳紙パックも回収

福祉作業所の回収状況

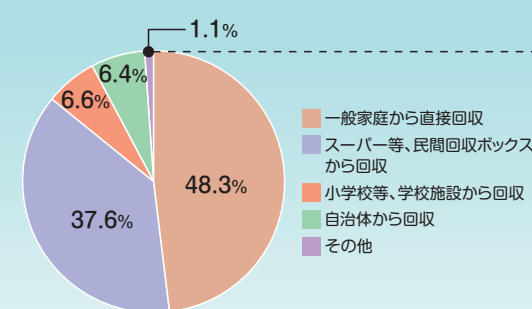
全体の5割近くが
一般家庭からの
直接回収でした。

今年度も福祉作業所と市民団体に紙パック回収量のアンケート調査を実施したところ、0.2千トンの回収量がありました。

回収先は、一般家庭からの直接回収が全体の5割近くを占めています。反対に前年6割以上を占めていたスーパー等民間の回収ボックスは、4割程度になりました。アンケートには、「再利用される割合やごみとして捨てられる割合などの数字や情報を、身近にわかるようにしてほしい」との意見が寄せられました。

平均取引価格は12.2円/kgと、2007年度より1kgあたり0.1円下降しています。

福祉作業所、市民団体の紙パック回収量に占める回収先割合



取り組んでいます! リサイクル

社会福祉法人 玉村町社会福祉協議会 玉村町障害者福祉センター「のぼら」

(群馬県佐波郡)

取り組み事例

障害者福祉センター「のぼら」は、福祉施設の運営や福祉相談を行う、地域の障害者福祉の拠点です。授産事業として、牛乳パックをトイレットペーパーへ再生した「ロンちゃんペーパー」の包装作業および販売事業、無添加食品や手芸品の製造、点字資料の作成などを行っています。

玉村町の牛乳パックリサイクルは、1991年に玉村町商工会青年部が町の美化を目的に、空き缶、空きびんの清掃活動を始めたことがきっかけでした。牛乳パックや使用済み乾電池などの回収活動を通してリサイクルの意識が高まり、牛乳パックリサイクルが身近な活動として定着。1998年より、商工会青年部が最重点事業として牛乳パックのリサイクルキャンペーンを開始し、町行政でも資源ゴミの回収物に牛乳パックが指定されました。当初は回収率もなかなか上がりませんでしたが、徐々に回収からトイレットペーパーへの再生、販売までの道筋が開け、現在の回収量は年間約13.7トン。年々増加傾向にあります。



牛乳パックを再生した「ロンちゃんペーパー」



施設内に掲示されている牛乳パックリサイクルの作業内容説明



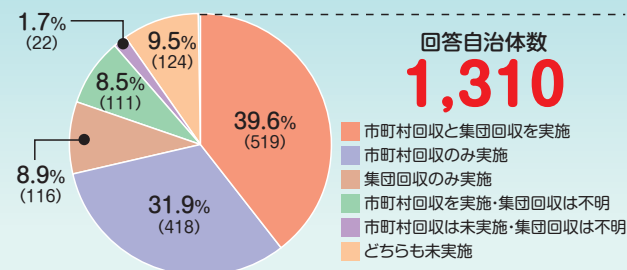
市町村回収・集団回収の状況

市町村回収は
着々と広がっています。

2008年度も前年度と同様、正確な実態把握のため、全国1,800市町村すべてを対象に調査を行い、1,310市町村から回答を得ました。調査では、市町村や一部事務組合などが行う収集運搬・処理を「市町村回収」、市町村に登録された住民団体による回収を「集団回収」としています。

本年度は、市町村回収・集団回収ともに「どちらも未実施」の率が10%以下となりました。分別回収が全国的に広がっていることが伺えます。また、市町村回収実施率は前年より4.8ポイント増の80.0%。市（政令指定都市、特別区を含む）の実施率は84.2%と前年を2.4ポイント上回りました。市の実施率は1994年の26%と比較すると3倍以上伸びていることになり、都市部でも分別回収が進んでいるとわかります。

市町村回収と集団回収の実施率



一般市・特別区で
回収量が増えました。

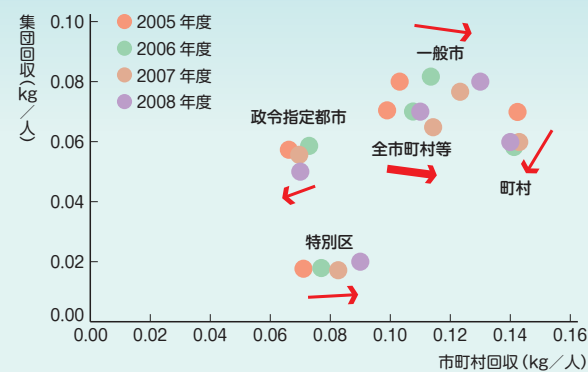
市町村回収量と集団回収量は、都市類型別に「一般市」「政令指定都市」「特別区」「町村」の4つに分けて推計しています。2008年度は市町村回収量が14.4千トン、集団回収が8.5千トンとなりました。

本年度も引き続き、全人口の64%にあたる一般市が回収量の7割以上を占めました。1人あたりの回収量は「一般市」「特別区」で昨年に比べ増加しており、分別回収の意識の高まりが見て取れます。

都市類型別の市町村回収・集団回収推計回収量

	全体	一般市	政令指定都市	特別区	町村
市町村回収					
推計量(千トン)	14.4	10.2	1.6	0.8	1.8
都市類型別回収推計量比率	100%	71%	11%	5%	13%
1人あたりの回収量(kg/人)	0.113	0.126	0.066	0.090	0.139
集団回収					
推計量(千トン)	8.5	6.3	1.3	0.2	0.7
都市類型別回収推計量比率	100%	74%	15%	2%	9%
1人あたりの回収量(kg/人)	0.067	0.077	0.053	0.020	0.057
都市類型人口(百万人)	127	81	24	8	13

市町村回収と集団回収の都市類型別原単位の推移

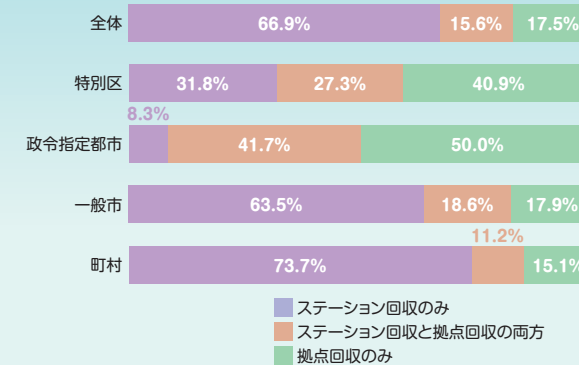


全体の8割以上が
ステーション回収を
実施しています。

市町村の回収方式には、ステーション回収（戸別回収を含む、いわゆる分別回収）と拠点回収の2つがあります。拠点回収に比べて利便性の高いステーション回収は、市町村回収を実施する市町村の8割以上が採用。市町村回収実施率80.1%と合わせると、全国の6割以上の自治体がステーション回収を実施していることになります。

ステーション回収の実施率は政令指定都市でも伸びており、本年度は8.4ポイント増となりました。特別区でも、およそ6割が実施に至っています。これまでは都市規模が大きいほど拠点回収率が高い傾向にありましたが、近年は大都市でも、生活者にとって利便性の高いステーション回収が広がっています。

都市類型別・回収方法の比率



取り組んでいます! リサイクル

北海道函館市

取り組み事例

人口約29万人の函館市は、北海道で札幌、旭川に次ぐ第3の都市です。1978年より、市、町会、学校、民間団体、回収業者が一体となって回収活動を進め、2006年より「函館市の街をきれいにする市民運動協議会」として活動しています。2002年には家庭ゴミが有料化され、新聞・雑誌・ダンボールに次いで紙パックの回収量も増加。現在は年間およそ115トンを回収しています。ゴミの分別、再資源化に対する市民意識も向上しており、すべての小・中学校で学乳紙パックのリサイクルが行われています。

函館市は拠点回収だけでなく、各家庭から直接収集する路線回収（戸別回収）も実施されています。回収業者が家々を回る路線回収は、高齢化が進む函館市において今後さらに増加が予想されるため、よりいっそう市民の協力や行政・自治会・業者の連携が求められます。



路線回収も実施している函館市



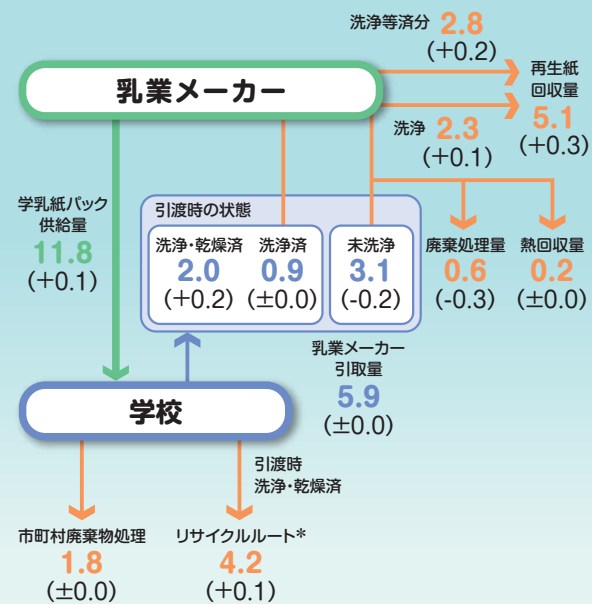
学校のリサイクル状況

「洗って・開いて・乾かして」
が着実に定着しています。

2008年度に学乳紙パックとして使用された紙パックは11.8千トン(前年度比0.1千トン増)。その78.2%にあたる9.3千トンが再生紙原料として回収されました。これは前年より3.0ポイント増で、学校におけるリサイクル量は年々増加傾向です。

さらに、使用済み紙パックを洗浄・乾燥している学校は全体の48.3%。ここ3年間で15.5ポイントも増加しており、「洗って・開いて・乾かして」の回収ルールが着実に浸透していることがわかります。

学乳紙パックのマテリアルフロー(推計値)



*古紙回収業者、製紙メーカー、市町村の資源ごみ収集、市民団体など

※単位：千トン

※()内は2007年度推計値との差です。

※四捨五入しているため、合計と一致しない箇所があります。

取り組んでいます! リサイクル

内子町立内子中学校

(愛媛県内子町)

取り組み事例

住民が景観保全やゴミ拾いに率先して取り組むなど、昔から環境意識が高い内子町。内子中学校でも、校内に「エコ委員会」を設置し、牛乳パックのリサイクルをはじめ、割り箸の回収、緑のカーテンづくりなど、活発な環境活動を展開しています。

生徒たちは紙パックを、水道で水を流しながら洗うのではなく、バケツに汲んだ水で洗っています。洗った紙パックはストロー穴の部分に針金のハンガーを通し、給食委員が校庭の隅でつるし干し。乾いたら段ボールに詰め、先生がまとめて役場に運びます。また紙パックを洗った水は花壇の水やりに利用するなど、無駄がありません。

小学生の頃から学乳紙パックリサイクルに親しんでいる生徒たちにとって、給食を食べることと学乳紙パックを洗うことはセット。誰に指示されずとも、自然にリサイクルを行っています。



バケツに汲んだ水で紙パックを洗う生徒



洗った紙パックは校庭の隅につるして干す

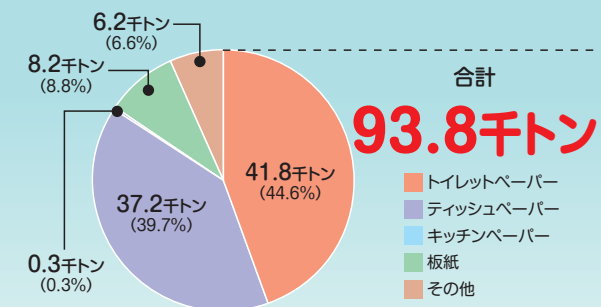
再生紙メーカーのリサイクル状況

年々増加する再資源化量。
トイレットペーパーが
再利用1位に。

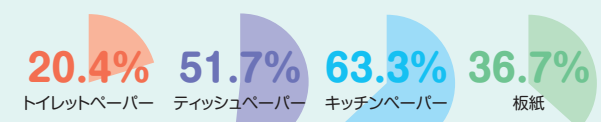
アンケートで回答を得た再生紙メーカー33社のうち、国内で発生した紙パック損紙・古紙を受け入れているのは21社、紙パック損紙・古紙を原料とした再生パルプを購入しているという回答が13社ありました。

再資源化量は昨年より4.6千トン増の93.8千トンで、トイレットペーパーやティッシュペーパーなど、家庭紙の原料として多く使われています。2006年度以前と同様に、紙パックが再利用されてできるリサイクル製品の量は、ティッシュペーパーを抜いてトイレットペーパーが1位に。なお前年度に比べてリサイクル製品への紙パック平均配合率は、ティッシュペーパーを除く3品目で3~4ポイント高くなっています。

リサイクル製品への利用状況



リサイクル製品への紙パックの平均配合率



取り組んでいます! リサイクル

コトブキ製紙 株式会社

(本社：福岡県福岡市)

取り組み事例

1962年創業のコトブキ製紙は、100%リサイクルパルプによるトイレットペーパー・ちり紙の製造販売を行う、家庭紙専門の再生紙メーカーです。佐賀県小城市にある佐賀工場では、1998年に品質保証の国際規格ISO9001を、2000年には環境の国際規格ISO14001を認証取得。業界で初めてダブル取得しました。具体的な取り組みとしては、九州内外から調達する原料古紙の品質管理を徹底するほか、工場が有明海に近いことから排水処理にも気を遣っています。

現在、原料古紙の受け入れは3,500~4,000トン/月。牛乳パックについては、古紙問屋からの仕入れのみで約100トン/月程度です。1日あたり平均150トンの古紙から、トイレットペーパーやちり紙を10~15トン製造。原料の調達先は九州内が45%と最も多く、紙の消費が多い関東・関西がそれに続いています。



コトブキ製紙 佐賀工場の外観



原料となる古紙のストック